

## 島・内田両教授の退官にあたり

本号は島十四郎教授ならびに内田久司教授の退官記念号として編輯された。

島教授は昭和五十一年四月より本学教授として十三年にわたり教鞭をとられたが、研究の焦点は特に保険法に当てられ、昭和四十三年には「保険委付の権利移転的効力」に対し各務奨励賞を受賞されている。また本学の学内行政においても昭和五十三年には社会科学系長に選任され、また評議員、研究審議会委員および人事委員会委員として多忙かつ困難な御仕事に携われたのであった。さらに法学分野においては大学院の整備拡充に力を注がれ後進の育成に情熱を傾けられたのであった。諸会議においての先生の発言は慎重・公正で出席者の思考に大きな影響を与えたと思はれる。教育面における先生の講義内容は慎重で派手さはないが、丹念かつ堅実で学生の評価も高く、正規の授業だけでなく毎年学生と合宿をされ、また学生のサークルである茗法会が発足してから今に至るまで顧問教官として司法試験等のために協力をなされ成果をあげられたのであった。また地域社会への協力として茨城県消費者保護審議会委員、水戸弁護士会資格審査会予備委員、同懲戒委員会委員も務められていた。

先生につき私が特に印象深く脳裏に刻みつけられていることは奥様との仲睦まじいことで、御二人で温泉を楽しま

れることは噂でうかがっていたが、大学と研究室間を奥様が車で送迎されている光景や、教官有志で泊りがけで館山に海の幸を求めて出かけた時も先生は奥様と御一諸に参加されたことも忘れ難い思い出である。

内田教授は東京大学法学部教授退官後、昭和六十二年に国際関係学類の人事により社会科学系教官となられ、従来から手うすであつた法学関係のカリキュラムに強力な補強要員として国際法を担当されることとなった。わずかな期間ではあつたが、先生の真の学者らしい御人柄と緻密な学風は法学諸教官ならびに学生に与えた影響は大きなものであつた。また社会学類と国際関係学類との間の架橋として重要な役割を果したのであつた。先生が本学に來られるということを知られた院生が満面に喜びを表わしていた姿を忘れることができない。

先生の輝かしい御経歴と業績については先生自ら記されておられるのでそちらに譲らせていただくことにする。

両先生が本学から去ることにより、本学創設当初の頃から在職されている法学教官はほとんど去られることとなる。私としては寂寥の感を拭い切れないが、両先生の残された貴重な遺産を受けつぎ、新しい法学発展に努力することが両先生への我々がなしうる最大の献であらう。

両先生の本学および法学分野への御貢献に深く謝意を表すると共に、今後益々の御健勝で研究、教育に励まれることを祈り本号献呈の辞とさせていただきます。